宇治拾遺物語　四　（江戸後期）

椙山女学園大学デジタルライブラリー

椙山女学園大学図書館

宰治拾遺物語

四

三島

宇治拾遺物語巻第四目録

一 狐人ノ法ヲヨミテ死ヲ免ル事
二 佐渡ノ国ニテ金ヲ掘ル事
三 薬師寺別当ノ事
四 妹背ノ事
五 石橋下蛇ノ事
六 東北院菩薩講聞ノ事
七 三河入道出世ノ間ノ事
八 進命婦清水ニまうでの事

東京学士会

九 業遠の化縁生事
十 葛昌忠恒ホ乃事
十一 法華寺院丈六佛事作行事
十二 式部大輔實重賀茂御正殿拝見乃事
十三 智海法師癩人法談事
十四 白河院御寝時物しめつれさせ給事
十五 永超僧都魚食事
十六 了延房に實因自湖水中法文ゝ事
十七 慈恵僧正戒壇をたてさせ給事

かゝる銭あつまりては、ためしをまうけ、むねよとしあから
くわうきうにて、たからとなりて、まうけなんと、貧しき人のいへに
ともしといふへきにあらすして、おさめぬ者なくんて
あつまりありて、在らくものゝまけありぬるに用ちかける
銭さつまけすして世に布ある事を我常に申きかす
能登国には鉄といふものゝ生すなといふ所なる銭と
つまにく寺のまうでもあをもの六十人そてあるすみねぬと
いふ寺の僧よろつのみやこ六十人にまうしありけるをのく住
[illegible]
まいりてゐる銭寺に住人きてかれからく銭あつまれるを
く池にともあらして[illegible]

まさしく身に金を持つるものなし、所を見てもきまてい
なりとといへともさうたつきてあつまてきなんやとといふ
法の文にはまうけとゝいふとゝいふことあるへからす
人といふまゝへさん行ったとしあて小舟てとくこれ抱
あまりし銭積ほてしまありてさもくをしやとそうるそ
まめやせ人といふとさらくことをすゝめまはうめかせて今は
あたをきて小船ありくく番の抱きし銭をとらせ
[illegible]
うりあるとくうちまされぬるまても身のかたくとしまると
きてやまの関をとあんあらせありまして寺になて人
[illegible]

よろづ[illegible]ぞ[illegible]ふくよつみてる物をとらせ
きれて身をとゝげよゐきさまでもてろよひきへ
ちくねへよろわそのちうれねとうの地こいづち
そもなくうせりあり[illegible]川よ[illegible]を[illegible]ども[illegible]
ちうもやこよをういてよもく失めうといふ[illegible]
しるど今乃あるあるとうれをうぶねやまるしゐん
あるうやとてうづれ[illegible]れ今八千ぬぞの
ありけるとでめうちうくをるうれを伝波ぬ
今あり[illegible]うと紙や國乃ものもうちけう
とうて
今ハむ[illegible]業師ち[illegible]別番傍郎とゆへあり[illegible]

別番ハ生れども[illegible]乃物をたつて[illegible]
らくよ生まれて[illegible]ねれ[illegible]
ちく死ぬるきざみよ[illegible]
とは[illegible]
くすみ[illegible]
くめねんちく中ちくぬきハ極ちれむ[illegible]
ともちうにおくらくうむ[illegible]
ぬすもおそなんでめくもそのの罷よ
うもとろへ地ぐくうむれもきるれとゆへまて
車につきてる罷ものゆ[illegible]
とせよ手めつくゆまぐうへうねぐその罷よろて

おのれ〳〵あるとていれつまに我いれつまんさるとは
は罷りてもしづかにまつべきなりとのたまひ拾を思
てんとおもへば大事なりとて法師ばかりさいぐしてこの
なりうはせよといれを通ぶるものもなかりけるこの
海くの頭領にてこれをねらひ大事なりとおもひ
くらくこうあるとて大の車をうしをくらせしをまなん
あるとすれば拾をうばつてをうたるこの法師
ちの大門のかたにあるなりとまはりてうたせず
くあるとさぐるとおもひ拾つれうたるこの大車むかへよ
ふまして寄拾をとかのまたつれさせる諸ちの別当の
ちぐのむしろをなをしてなをしてなるこの通

越後のなかくひ郡にすむ下拙ありけるがかのよ
しあらそひしとき田をたかやすひまなかりしがむかしに
苗代をとして植つけまたは田のまはりより苗田をなは
いまだうらみんむこともよく見おきてありてしめ
よく荒へ巻をあき鍬にて打かへしたまのまいくて道に
家の奥にたたる女によりはてて十一二ばかりなるをのこ
をんなこ二人の子供をかまへてめでたのもしかきこく
父母もろともにくらしものやとてんとて陰によあるは海
にひかりのよきおいかねはて遊あるいはまはりにむてまちに
しつかさま思ひ侍みすましてとまそうりけるに
此もらへしもなまそにぬ入るきりにふもれの[illegible]

しまかたより出けるかとこれつきはなれてしまき
いくさまも出ることなけるほどに干潮になりてまちかへしたる
又湊へかへりまかりて沖にてふいに風吹きまさりければ
船もあやうく見え棹もきかでゆくへしれずなりにけん
るにかかりけるをもとめて沖にて尋ねさがしけれども
まつべきかたもなく浪に流されてかくなりはててけり
にありけるを家にては父母も人も待わびあはれみて母は
の人もなくさめけるよしを聞て嘆きて闇のくれはてて
かくしてこそあるらん浪にひかれてもしや帰るかと
らんかくも思ひわすれもやらずいとどあはれ
かくて日数ふるほどにかの男は南の沖にあり

さる嶋よりはるかに浮きたくきなりしむかしよもとくわたりてく
むかし浮木にそこえれしいつの色人ありゆへきこともかはりぬ
もし嶋よりかへるとていれもなふ後へいまゆくまへきかたくなりし
さりしとてたしいのちかはるつ無邦よりあらそひ出のちられまれて
あらんかぎりとてとも出て浮く色今にていきをあらぬめぐ
き浮き方にいつかゆしく いのちハあるへても我いでこの苗
のりきぬさ絶よりへんといひてきはハ帯りとそて氷の
あられ乃あるとある所乃田よりゆくりぬべきことを見とや
いつしく薄(すすき)獺としあるとをまいで本地て居(いわ)りとつく
つと帯るなり。桃乃本のかりぬありけるかかりまいれいは
うきはまりなゆくあるしくてはそれ秋かりの姉

あやしさんの無きりやあつきまん浮くて寄る田人の外くて
出時く二見浮くりもするうちもあれかのさるともきれぬ。
おかく外をしれありてさるとぞてあるべきやぬるはめかと
こうり姉よきりておう乃とく女子あまくうら浮くまてきりく
うきりと妻あけとあいあり行くし浮く大なる嶋めりまいれ。
田たりまちもおかく能とく此比には妹背の人浮く来たり
さる人ともこまりよあまりるところありてぞあんなる。
妹背(いもせ)嶋とて大なる嶋乃南の沖よりあるとてへ人のまりし
此ち人乃妻となりてし女あるときわり雲林(うんりん)院の葬讃
よたるをはかりよさいりまる折にして西流乃無んちく
ちりてし石橋ありける。氷乃さしとかい世あまりこ手たり

かの女其中にもことにあゆみ給へりけれどもしばしば我かたへ恋て
もくさぬ事にあらずして人（さまたげ）するといへどもなほ涙き
らせける心ぐるしさのきはみしらしと恋しく思ひけれど猶下
まくらかなしみのあまりにやみやまじにもの思ひ染つる
女のちぎりのおもひにてゆくへもしらずくらがりなるゆきを見
ちかける女の見ゐるにもあはれにおもはれて恋しくおもひは
かあらん事をいふさかれしきものあしともしらずかれが都（みやこ）
若きんとおもひや此事のせんなきんとてちかり
くわらそけるに此の女をきて見えけりとすまいども
思ひをきてよくかなしみのあまりにもちかひねむりけるは又都を
し見てみけり人あまたもくちなしの女よくしてけり

あかん涙をつゝみ人にもみせしかども思ひ初につきに涙ぐむ女の
同じ事になりて心をまどはしまつる恋なげきさんとこそ思ひ
くに女のちぎりをあはれにてあゆみゆくなれど思ひ雲林院
よそにみる涙きぬきるのかひしもなかりてかの女の
ぬまはかの蛇（じやうじや）にもなりてくはりにけるまゝ袖まくさ
ましく愛欲のつもりさえくへ涙あしく希（けう）なれしときかなや
同じきされ心ざしあひ涙とてあかず候てぬまはそ女をも
いはんするもたえかねてくつかけさゝもつきて我ぬれ此の女と
もとの思ひ出さんとそ庭にちきりて京をとゞよ
いくぬ下に夜に行とかりくらせずしれし思ひのあまりに
くらなく思ひしに入ぬ此中にてこれから思ふまゐりける

おもふまじき人の姿もなきがごとくならぬ事なかれとかくす
縁あるとしもあるまじきめおとこのなかにあらぬ事をとみ
きゝやと思ふまじかるべき事なりとげにもまことにそれならぬあ
ゆゑにかならずよろしからぬ事なりかならず人へもんゆきをするべき
所もなくてぬすとゞめすれどもかなしき事なるゆゑさせ給ふ事なり
さむらひのくらべものはなはだしき女すらこと心あるひとにおほせ
よはくれ候ふ事はなし人のまことはいへども夫すらも女をさそへ
それらの縁をしていはゞおいてむかしの事あるべしすけれは
ともかくもよしとれども事がらもしかりといふはよく
縁あるへきかへすとも身をまことにとかくのそこまれ
いまさらしきものゝやくにもかゝりて女のならぬなる

さりごしきの志をもしらずしてつまどひかすまゝにく
みだりなる縁をむすびて此女をも洞をりあけてこそちか
夫をもいやがり勘当をうけ女房はあるやうにけしきあ
かろしめらるゝに家を仕するものありとみ心をかぬと
是日ごろくらしたれはましてぐちにもなりねがひまして何ぞ
乃ありさまは我と心べき事もあくまで家ぬしとある
ゆる女のいふ事をおくやどきさせ給へるありさまに流や
あるうちにそそてこそらん夫を出し給ふとなくとはいひて
くれ給ふゆゑとて夫ともしれりと知出してあづきされは
うまれつき人へもかれぬ女ものぬめるといはばやいかにあらんまで
らんときれてもちゝはゝもうれしからずとやかくてもつきそへやと

思へども法華経ハ我くの先なあくなあらんと思さ
そのもいてくこれさんなりこんとて夜中乃出くら海
てはよものなれども後よりゆるのこそなき法とく身
大清ねまそのあもしねぬおまくはいくあんと思
くはよどひおまてこれしおの女　のきなどくねおさ
てごもくもあをりてあるすどとかがゆるあよい
なるよい義法てて人一まてつへこいくよん法へる
うこへこおのねる花こよ人おあとおくみ
まのておくるとうんを人いてこもくらものいなる女
きこうぎそうるうくこふなうこのまこへ人をうこ
とかりしくこをおくくらあこのの法ならまて

乃ちこたかくのこうれをくてこうしくおりいの
さるかとに海日とのまこ行をしの石法あこを一法
しにそこまをくまくおるくれまぬうまくこうまこと
思ひれすくこおの人のおこ法うんあをえこをまこぬ
てかのくこうのこのもやこんとおくこれこもよこう
しをどよがこい海乃法をよこのの行をれくこれ法
こをもよこのこと思こもこのよりてあひくこ法をこう
を法おくこのくこよのこくおくこつこ法こへなこの
してこれこう法をてへこよのまこ法のこまこ海乃こる
ちくあこと法をこいよくく法をいくこ法こくおくて法
つこをるかこおの乃ちこのこうこれこあこせをりてこうき

かくあれどあて隠るをかくるべきならねばとてかん
兄清ることかなしみにおもはしく嫁さく先の屋ぞおくる
女乃いふ方に海あとくハせの道ハお中にものゝぞはくる
まさに傍に流るゝおくによ待るとの南のぞさるきの女
葬礼(かさいかい)によ参り侍しなるまうでれやとにありあれ伴させ
うぞ志りまかせちてあゆくまよりせしにたよりなの
かど乃河のいとしてもいと錢あまた過ぎせ世にとりし下より
すぐして歩りとしこぐちなきのいでくきて流ともり
さいわいと錢おほくと清ぞやさんとそれらどを流ぞな
つまくハいとぞ其せんもあしかれおとりてをやあらんず
らんとかくおしくさゝ申きはかりしなり。鎌海の絵

いもそのくちなく侍りしかども人を見しに流されども
しなりなそでく出でゆうしおりふしすまり手なりし
かなしびをしそん屋にゆうしくて世をかまびすしく
あて見まくよ錢あらし侍流るなり。その夜なもぐな
まで八代くちはてそしられどとに侍り清くなりぬ
くさ見侍つまはす。つちなきをみし侍り。こゝろざしぞや。それ
よあくまてかくうし家にて錢しなへハあさましく
かくうるしくかくあきましやしや。いよいよしられ
なに流れてまくはおどろきをさむなどいれてこられ
ほかに流はねよ侍りてよれ流くさる人はなん嫁よせぬ。
まそ、おのれ女よりほかのよくなりてこの清ハなよ度

さらば大森乃下家司ハいづく迄まで汝まにあり
くだりけるとき事かなはぬぞありけるを思ひねだしかくれ
あらじかしとて
東北院(とうぼくいん)乃英講をしも先に来たるをへて はやくきこえあく
人ありく人々をまよ七歳にて入らりける七年ばかりいれまゐる
くもの検非違使(けびいし)ども名流まかりて身をまきいみじき
悪人なり二二歳人々をまかりてあんとせきくへしか
ふかくまいりとかくしまゐしていく仕へばくみわうしせし
さがくて七歳までは浅猿(あさまし)ゆゝしきことそこれな
ちまきが足きろしてんとくさぶ給へるくあしきりにおて
りくるんとするゆゑよろづの桐(さう)人ありきを

うまづ揃へいきおもくゞおもあしきりんとするもの
まよるもくいふ盗人をのせよゆゑまよかれ
たゞかたらば殺生すべき桐ふくとかれたればし
けるまゝなるものもかかしぬ桐をなる法なふといゑ
くたとゆよおもはんとすれもろれをらんとする
是乃人々の念わくたるあしたのくるとよりて足
残まゝ殺生まべき桐あるをのれあしきをまて
さいりでゆるん盗かろくとおそきされけんとめ
まるものどもあつれく検非違使よめつて乃
まゐ侍くいれを是も盗んだそれき桐人乃ふと
あまときどもまからろれまでをなくても歯もおつる

事なんあると申されけれはさらはゆるしてよとてゆる
されしよりその時ゆるされし人かくして法師になり
くいうしたまひよなりて此井蔭たもちはじめくるやまこ
ちるよ桐木かかれくいづく候ひなりくしそう世にかれ
くまさしかうちやうきんずる人もとろの桐ありさもかがろ
あれ桐へふれうふ事のてもあるぶなきりそうじめなを
さる藤をしきふますてふもしぬるぞ浦にしてまあくれなる
事なりし
冬河入ゑのまる浪もてありけるおりふとこれつまを
たびうを淀くうちかうちうのき女よも法ききてふれを
妻ありて三河へおくくだると成るなどにうれ女ゑし

またうれしくよありけるかくちちも切らう雨くらせり
ある綾の糸し雲乃あまるとにをかくをせくうふもなき
をかくうれあしくくう綾をいゆりきふよあさまよ
しきさも乃口るとかありきふそでうしむかいづき
てふくくをふつとくきまゐりまどるを世うき袖ををそ
あかまさきとて神よれありきるにて三河乃西の風まつりとふ
まゐしきふよゆきりみとふ事に旅をとゆきるう
おかしあるなくふたの御のきるんとおりふ人ほく
きるも雉子に渡せよなうとらくぐ給それのそでまでうけるを
いさらの雉をいつをひく渡くるまで今らんいてよまする
あかりまれ雨よ衆とふらんとうれまれていさでうふ

さきてそのをとくくさをきれども此ゆみよおもく
くらんとしけるなどに仏道をとかせたまひける
内よりあきしきさずくおこる女乃かたる我をも見え
給ひけるものなるをさあさ給ひしあれの心いろくてあ
らんかとそんとおきれけるとくれくるおもはせられる
なれる我をめづらしともくらふしてもつくるはかなき
なくてあれなるほりてかりく地よくうらくれて後
つらのはかりあるとなりし給ふなりしたがひとてかくれ
もちてはれなしさらぬとにあれなきもくるしとを
おもひしおもひとなるなり
いまはむかし進命婦(しんみやうぶ)わかゝりける時常に清水へ

まいりけるにかゝる師乃僧きよかりき八十ばかりの者なり乃や
法華経(ほけきやう)を八万四千余部よみたてまつりたるものなり乃
女房をみて欲心(よくしん)をおこしてたちまちに病
になりてすでにしなんとすあひだ弟子どもあや
しとおもひて問ていはく此乃病のありさまいか
なる事にかあるかと問ふにゆめゆめ乃あるか
おもひをおこしよりし事よとふこの時かたりて
いはく京よりの清水へまいる女のちかづき
なまめきて物をとやさしくおもひしより此三ケ年
飲食(おんじき)乃病になりて心がまえ一てゝ蛇乃身に落ちなん
なる心うき事とてよろこびまかりて一人進命婦乃もと

へ行く世乃事哉つゐに此よ女なるなどはなくなくまよひ
つゝ病にゐいゝしらぬとうらみて年月をくらしけるあれ
はもはやぎりも銀(ぎん)針(しん)をたてそてゐたる面うちてて兄乃みゆく
されども此女かうみて出行くもくいふ面きせし
此世ののこるにてま済る所ぞしあさからぬ御事なり
さゆゑへかともつそておめぐきれん事うむきをらん
此身くはだ相まこさせ行えさおもしと此世よ風とりおもかさ
らまこざりしといふさきぬ此備のさおとされく念珠
掛あるとくをりしもうてゐ面うらまつくきてら瑞
行来より八万余りとなんあり出るゝ法華経乃寂(さつさい)
つ乃文ことごし此女のはなある修をとうるま世行きく開白

供養大とうまの世行へ女をさうまう世行つく女済度成仏とさ
給へ入備哉う所を給さく清勢(かせい)乃大備にをとうま世給
へといひ礼物えうくさ由肌もら死ぬを度此乃女風の済
度よ思えまいまの世そくえくとて京極大衣で条尖
三井乃咲務死もぬうらん死よ連りとそ
あまーをも今もむりし業(ごう)遠(ゑん)錦よ死る出うき済堂の
入るの衣おわをさらまこ帯をみてゐれまくくべきを事あん
かし家役乃事やしとて衆脱(げ)る観海(くわんかい)信の哉めし菜
遠(とんと)の衣よむかれ行てかお持出る者死人へめら流ち
まは積(そ)ましい(ゐい)て面ある哉いれく乃らかあくき目をと
閉(とぢ)くまりとり

ちかまさを今さいしゝ民部大輔萬昌とゝ乃
あつまる城法性寺時義入所乃屋敷よりも
ゆきさきやいへのありまさ伴乃萬昌法師
俗名をもとめるやうに乃侍をもとめまのもあり
をそれてまいりさまと者る城和田小金入をあまさを
く等法名俗しきれまいりにきりさて大氏所
司よ地やさんとよれをまいかあれくふよ乃を
あつまで服をもてゝ乃侍よ俗しなのみをいの乃
るおとゝで萬昌法をいかなるものとをりをるゝを
らんとをきりよをちんをれをまでゝ地をいゝで
めくりをふをとをりて乃人をつを昌いありやらを

うををらをちんとゝいあうをあをきへ別乃をとゝ
むゝ民ア大輔立信乃をれあつをりををうアをれ
とゝれをりあをきへおうとゝれをく逐ををり又安西
司らのうをるまへ城ををををねをゝ陸奥ゝや
うををのりをゝ和りある城ををりあく随兵
をあゝををゝ乃をゝにゝれをる城耳をくをを
随所司ゝを人よをゝうをくをるをあふをゝいを
よの信をゝをををゝをゝめををへ乃をゝ人乃をりあり
あゝもをををゝをぬよをゝいよ武石府生をををれ
法を城をゝ乃人をくをりをあををゝ乃をゝをゝいを
ゝあをを法ををよををゝをゝ者ゝ乃をゝをゝ

六佛をはくらる伴乃仏心の灌仏院より安置し
奉りてまつる所
おもてを今いむし武アた楠宝重八雲義へ
たしあしびなきものくを生乃運のろうあして
よむもぎをる利生よあびてうしく人せん義よ大ぬ邪
きう宝重をきりいの角うくをてあをうせかくしき
をよし月希り宝重法事地をたんをてまつる
角きをすし形ゆ月ある数下乃出社よ法屋しをう
数上へをつくあのくあうしを社ををして行事に
あれをあ百官供を法ねの乃をし宝重かく義
よかくをあくをれて風禁軍代中よ食堂乃位一巻

[illegible]

[illegible]

[illegible]

あまをとこ今こしむかし南乃京の永超僧都と奥をき
かぎりし時北河とも人くくくしぎりけるを人なり。云
法師とめくを京乃あひだ人なぬく奥をくく
くらべかまくくるるけすまの丈六堂の色に
てのろるまごろのよ。才ゑ一人近をを乃を家して奥
をとひくくをめをりををと伴乃奥れをけらをを失
よをるあ面をりかるるをぎるをのどもうれを色の左面
をとをるをををるを我面れをるをのぎきをれををぬ
ぬる所をを法れ乃つをく永超僧都を奥ををを
をるありをて左ををのぎくとをかるれをるものむら
乃を面ををくをを左面をを我をてをぬるをものかかり

きるを以奥乃をる面をを一字をれを以をを我をあぬるを
をりて僧都のをくををりをれをくをのを我を
僧都を乃をを一字をを抽ををねるををくを
かを

ををを今いむを一字延房阿闍梨自吉を乃を
へををををくを唐崎乃を色を我をくをを有相女樂
行幸依親思をを丈編一をを中をれを派中を歌
仏編法花不入猥を時をを乃白紙を編をを
あり。をを乃思をををををををををを
をををを奥房僧都実因を名のを
をを河ををを法文を強をををを僧事を

あるめくられぐ、まきはゝ僧まきあるいくあるくそれをそれ
をくやとてそれをそれをそれをそれをそれをそれをそれを
ゆよぐめをとも、我をまぐ、て仕ちとも申せとそれ
をそるとう
あまきも今いひて、恵僧都は近江の国清井郡
人あり。志いぬの戒壇と人よらあくぐうをれをえ
清ぐ、もある清井郡司をきよ師
壇して仏事我供をあるこの僧正我法をま
とく僧膳乃をうして大豆酢をいて酢を
をくあ我をめしをとをいかくあぐ、をそをまをれ
く郡司をくあくかあるを酢をとめをつまはをし

清ぐ、をとて法をくをくをくをくをくをくをくをくをくをくをくを
をりてをくをくをあるとをくをくをくをくをくをくをくをくを
あるくをくをくをくをくをくをくをくをくをくをくをくをくを
くをくをくをくをくをくをくをくをくをくをくをくをくをくを
をくをくをくをくをくをくをくをくをくをくをくをくをくを
をくをくをくをくをくをくをくをくをくをくをくをくをくを
をくをくをくをくをくをくをくをくをくをくをくをくをくを
をくをくをくをくをくをくをくをくをくをくをくをくをくを
をくをくをくをくをくをくをくをくをくをくをくをくをくを
をくをくをくをくをくをくをくをくをくをくをくをくをくを

同一家にうまれしものの身にて人殺をかさねて不日に
戒壇をとゝのへてまゐるとゝて